

第2回学校の未来検討委員会 会議録

日時：令和8年3月25日（水） 19時00分から20時30分まで

場所：愛南町役場 3階 大会議室

出席委員：17名 欠席委員：3名

議題

- (1) 学校の適正規模等に関する考え方について
- (2) 学校・地域間の距離について
- (3) アンケート調査について
- (4) その他

事務局

定刻となりましたので、只今から第2回愛南町学校の未来検討委員会を開会します。最初に、開会挨拶を中尾教育長から申し上げます。

中尾教育長

こんばんは。年度末の大変お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

今日は、こういう形でワークショップ、いわゆるグループ討議がありますので、ファシリテーターとして、あるいは記録として、スタッフが増えています。

まず、つい先日、この中にも参加された方がいらっしゃいますが、南宇和高校の魅力化ワークショップを御荘文化センターで開きました。大変素晴らしいものでした。子どもたちが、あるいは地域の方が、若い方あるいはお年寄りが、どんな学校、どんな南宇和高校が行きたい学校になるのかっていうことを真剣に話し合ったんです。

この会も単なる施設とかを話し合うのではなくて、子どもたちがどんな環境でどう学び、どう未来を切り開いていく力を培っていけるのか、そのより良いものは何なのかを検討していく会であります。

ただし、話し合いを広げてしまうとどんどん拡散するので、今回は適正規模、あるいはそういう制度設計の中でそれをしっかり知った上で、どんな学校だったら子どもたちが行きたくなるのかな、希望ある学校って何かな、夢ある学校って何かなということを今日ここで話し合っていたいただいたらありがたいです。

学校の未来検討委員会が提示するものは、つまり子どもたちのためなんですけれども、子どもたちが学校を作っていくのではなくて、ここにいらっしゃる皆さんがその未来のより良い学校を提案していただける、つまり作り手です。で、皆さんがこうやって提案した学校をさらに子どもたちと先生方が本物にしていく。

作り手は皆さんです。どうか今日の話し合いが本当に希望あるものになるように期待しております。どうかよろしくお願いします。

事務局

今回の委員会はグループ協議を行いますので、ファシリテーターとして学校教育課の職員も参加することになっております。

また、〇〇委員と〇〇委員は、今回のグループ協議ではファシリテーターとして参加をしていただきます。よろしくお願いいたします。

では、早速協議事項に移ります。

ここからの議事進行につきましては、学校の未来検討委員会委員長であります愛媛大学教職大学院の露口健司教授にお願いいたします。

露口先生、どうぞよろしくお願いいたします。

委員長

はい。皆さん、こんばんは。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

本日の会議は、最初に事務局の方から、文部科学省が示します適正規模に関する情報提供と、町内の小中学校と各地域の間の距離についてご説明をいただきます。委員の皆様方から、愛南町における学校の現状や課題、そして改善策などにつきまして、グループで、その後、協議をしていただこうと思っております。活発な意見交換、ご提案をいただけたらと思っております。

それでは、最初に事務局の方より、学校の適正規模、適正化配置に関する考え方につきましてご説明をお願いいたします。

事務局

失礼いたします。では、学校の適正規模等に関する考え方についてご説明いたします。

資料の1の方をご覧ください。1番の適正規模に関する方針、これは、国の規則及び文部科学省の手引きからになりますが、まず、国が定義するものとして、学校教育法施行規則第41条で、「小学校の学級数は、12学級以上18学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別の事情のあるときは、この限りではない。」とされております。12学級以上となりますと、各学年2学級ということになりますが、人数に換算すると最低でも216人、18学級になると35人学級で630人が標準ということになります。

次に、②の中学校については、学校教育法施行規則第79条の3で、「第41条の規定は中学校に準用する。」とされております。この第41条というのは上の小学校の規程になりますが、中学校においても最低12学級、1学年につき4学級必要ということになります。

現在、この適正規模に当たる学校は愛南町内には1校もありません。

国は学校規模の分類として、小学校で6から11学級の学校を小規模校、5学級以下の学校を過小規模校と定義していますが、愛南町の場合、平城小学校、城辺小学校、一本松小学校が小規模校、それ以外の学校は過小規模校に当たります。

また、中学校は3から11学級までの学校が小規模校とされておりまして、町内3

つの中学校全てがこの小規模校に定義されることとなります。

特に町内の中学校においては、学校の規模が小さくなったことで、これまでのような活動ができなかったり、部活動の人数が揃わず、練習を他の学校と合同で行ったり、また大会にも単独で出られなかったりと、すでに生徒や保護者の皆さんにも何らかの影響が出てきているのではないかと思います。

さらに、③の「公立小学校中学校の適正規模適正配置等に関する手引」では、小学校は1学年2学級以上、学校で12学級以上あることが望ましい、また、中学校では少なくとも1学年2学級以上、学校で6学級以上が必要だとされています。

次に、愛南町でこれまで定められた学校規模の方針を見ていきたいと思います。

まず2番の、平成18年に愛南町学校統廃合検討委員会が示した基本方針として、小学校の望ましい規模が25人編成で6学級、150人から12学級の300人、また、下限の学校規模が学年10人でおおむね60人、中学校の望ましい規模が25人以上の6学級から30人以上の12学級、下限の学校規模が学年20人でおおむね60人と定められました。

次に、3の令和4年に策定しました愛南町公立小中学校再編計画は、これは令和2年から3年にかけて開催されました愛南町学校等廃合検討委員会の答申をもとに策定されたものになります。この時は、小学校の望ましい学校規模として、12学級で226人から300人、また、下限の学校規模は、平成18年度の時と同じく、学年10人でおおむね60人、また、中学校の望ましい規模が6学級で123人から150人、下限の学校規模は、平成18年から半減して、学年10人でおおよそ30人という風に定義をされております。

実際のところ、国が定義する学校に12学級というのは、中学校の場合、学年で4学級必要になります。1つの学年で約110人いれば4クラスになりますが、もし愛南町の学校が今後1校になったとしても、今後学年で4クラスの編成はできないというふうに推測されます。

また、小学校においては、これまでに策定された再編計画では、小学校は旧町村に1校ずつ残すという配慮の上で、下限の学校規模を学年で10人と定義してきましたが、今後は、旧町村の学校同士で再編したとしても、内海地域や西海地域で学年10人の編成というのは非常に厳しく、今の人数ですと、再編したとしても複式学級は解消されないケースも出てくるものと考えられます。

次に、裏面の方の4になりますが、通学距離及び通学時間についてご説明いたします。

まず、①の通学距離についてですが、国の目安として、小学校はおおむね4キロ以内、中学校ではおおむね6キロ以内というふうにされています。また、②の通学時間については、国の手引きの方で、おおむね1時間以内が目安というふうにされています。

この通学距離と時間については、必ずしも守らなければならないというのではなく、あくまで目安とされているものです。

実際の通学時間については、国の全国調査の結果が出ておりますが、小中学生の9

割以上が1時間以内で通学しているという結果が出ております。

また、手引の中では、地域の実情や児童生徒の実態に応じて、1時間以上や1時間以内の適否を含めた判断を行うことが適当とされております。

愛南町内の通学距離と通学時間については、この後の項目で改めてご説明します。

次に、5番の学校の未来を協議・議論にするための要素ということで、小規模校と過小規模校しかない愛南町におけるより良い学校教育とは？ということで、小規模校や極小規模校のメリットとデメリットをここにまとめてみました。

例えば、学習指導の面でのメリットとしては、小規模校においては、1人1人に目が届きやすく、きめ細かな指導ができる点。またデメリットとしては、人数が少ないため、多様な考え方や意見に触れる機会が少ない点が挙げられます。

それから、学習環境の面では、メリットとして、落ち着いた環境で学習ができる点。またデメリットとしては、競争意識や切磋琢磨する機会が少ない点が挙げられます。

また、小規模校における人間関係としては、メリットとして、教職員と児童生徒、児童生徒同士の関係が深まりやすい点。デメリットとしては、人間関係が固定化しやすく、トラブルやトラブルが起きた場合に逃げ場が少ない点。

学校活動の面では、メリットとして、学校全体のまとまりが強い点。地域との結びつきが強い点。デメリットとしては、子どもの数や教員配置が少なく、活動内容が制限される点。また、部活動の選択肢も少なくなる点が挙げられます。

それから、教員配置の面では、個々の児童生徒の状況を把握しやすいというのがメリットとして挙げられるかと思います。また、デメリットとしては、教員の数が少なく、校務分担の負担が大きいという点が挙げられます。

このようにメリット、デメリットがある中で、小規模校しかない愛南町の学校における課題というのを、その下の方にいくつか拾い出してみました。

まずは、0人から1人の学年が存在する学校、また、同性の同級生がいない学校、これらについては、前回の統廃合検討委員会の中でも課題として出されました。来年度は、学校の中に同学年がいても1人、また0のどちらかという学校も出てくる見込みです。それから、教頭や養護教諭が配置できない学校もあります。配置の条件として3学級以上必要になりますが、これらを満たせない学校というのも出てきております。

もう1つ、複式学級のある学校ということで、町内の小学校5校に複式学級がありますが、上の表の中にある「学習指導上のメリット」という部分が、複式学級になると半減します。

それから、中学校における免許教科以外の教科担任というところですが、これは令和3年の学校等廃合検討委員会の中で、当時の委員の先生であった教員の方からお話がありましたが、それを引用いたしますと、「免許外の授業を行うというのは、専門性という意味でも授業の質に少なからず影響が出てきますし、教員にとってもかなりの負担となっています。また、学校の中でも、その教科の担当が複数いると

ということで、学び合いの機会とかお互いが切磋琢磨する機会も出てくるのですが、小規模校で全てを1人でこなすだけでなく、免許外の教科まで受け持つとなると、どうしても負担が大きくなる」と、前回の委員会の中で発言がありました。

そして、部活動のあり方という面では、部員数の減少という面もありますが、生徒の減少によって教員の数も当然、定数が減っておりまして、部活動を見られる先生の数も減っております。

また、国が教員の長時間労働の是正を進めているところでありますので、今後は部活動の地域移行という流れも進んでくるかと思いますが、現在のように教員が顧問を務めるという形での部活動はさらに難しくなってくるのではないかと考えられます。

それから、次のページになりますが、国が示す適正規模に近づけるための対応策（例）というのがありましたので、抜き出してみました。

まずは、通学区域の見直しという風にあります。これを愛南町でもし行いますと、愛南町は全ての学校が小規模校ですので、区域の見直しを行ったら片方の学校の児童生徒がさらに減ってしまうということになってしまいます。

下の学校選択制については、例えば①の自由選択制にしたり、②のブロック選択制や③の隣接区域選択制という制度がありますが、これらを愛南町で行った場合は、おそらく周辺部の学校の児童生徒が中心部の学校へ通学するケースが増え、周辺部の学校の子どもがさらに少なくなるという事態が想定されます。

また、④の特認校制や⑤の特定地域選択制というのは、都市部の周辺の地域でこのような制度をとっている学校があります。例えば〇〇市の場合、山間部の〇〇地区で市内全域から児童生徒を募集するというふうなケースもありますが、愛南町のように全てが小規模校という中では、他校との差別化が難しい上に、結局、少ない児童生徒の奪い合いにつながってしまうということが想定されます。ですので、この学校選択制という選択肢は、愛南町ではなかなか取りにくいのではないかと考えております。

その下の、「統合」とありますが、①の既存施設を活用というのは、これまで町内の学校統合で行われてきた方法に近い手段になります。

また、②の新設統合、これは、新たな用地を確保し、複数校を統合し、新設校を整備する。そして③の分離統合、3校以上の統合予定校のうちの1校を分割して他の学校に統合するというのは、これまで愛南町では例がありません。その下の「地域の状況を踏まえた工夫」として、①の分校とありますが、例えば、小学校の低学年までは地元の分校に通い、高学年になったら本校へ通うという例もあるようです。

また、②の組合立学校化とありますが、これを愛南町に当てはめると、例えば宇和島市や宿毛市と合同の学校を建設するということになりますが、これは地理的条件からも離れすぎていますので、なかなか現実的ではありません。

③の遠隔合同授業等ということで、最近では、ICTを活用した遠隔合同授業を行ったり、また、複数の学校が連携して専科指導の充実を図るといった例もあるようです。

また、その下に校舎の増改築等、また新設という例も出されていますが、こういった事例が国の方から示されているところをご紹介をさせていただきました。

委員長

ありがとうございます。ご質問等は、この後、地域・学校の距離の説明の後にお願いしたいと思います。

それでは、続きまして次第の2、町内小中学校及び地域間の距離につきまして、事務局よりご説明をお願いいたします。

事務局

はい、失礼いたします。続きまして、学校、地域間の距離についてご説明いたします。資料2、学校地域間の距離という表をご覧ください。

まず、小学校の方になりますが、左側に学校名が書かれております。そして、黄色の網掛けのところに、校区と学校までの距離、それに通学時間が書かれております。例えば、1番上の家串小学校の欄を見ていただきますと、網代校区からは、小学校までの距離が14.7キロ、通学時間がバスで約29分かかっております。

以下、各学校の校区ごとの距離と通学時間を入れております。

この表では、現在児童のいない地域は、備考の欄に現在は児童なしと書いておりますが、現在児童のいる地域で最も通学時間の長いのが、一本松小学校の増田地区で3.5キロ、徒歩で42分かかっておりますが、現在のところ、町内で通学に1時間以上かかる児童はいないということになります。

それから、黄色網掛けの右側になりますが、これは他の学校への通学を想定した場合の距離と所要時間になります。

例えば、1番上の網代地区から柏小学校へ通学する場合は、21.5キロの距離をバスで35分かけて通学することになります。また、平城小学校に通学するとなるとバスで48分、城辺小学校になるとバスで53分かかるという風な見方になります。

もし、町内の各地域から中心部の学校へ通学することになる場合、最も時間がかかるのが1番上の網代で、最長で53分で、国の目安である1時間は切ることになります。

また、先ほどの徒歩で40分以上かかっていた増田地区については、もしも城辺小学校や平城小学校に通うことになった場合、バス通学に切り替わることが想定されますので、再編によって通学時間が短くなるといったことも想定されます。

次に、2枚目の中学校の方の表をご覧ください。こちらの方も各校区から学校までの通学距離と時間を表していますが、通学手段はバスと徒歩で算出をしております。

この中には自転車はないんですけれども、自転車については、徒歩のおよそ3分の1の時間で通学できるとお考えください。例えば、御荘長洲から御荘中学校までの距離が3キロ、徒歩で36分となっていますが、自転車の場合は12分ほどで通学できるかと思います。

中学校の方も、各地域から町内中心部の学校まで通学すると想定した場合、最も時間がかかるのが1番上の網代地区で、城辺中学校から通学する場合で、小学校と同じく53分ということで、1時間は切るということになります。

なお、愛南町の場合、これまで学校統廃合により再編先の学校へ通学する手段として、再編された全ての地域からスクールバスを運行しており、現在16路線で運行しています。

また、通学に自転車を使用する場合は、自転車とヘルメットの購入費用の補助を行っています。今後も学校再編を行う場合は、教育委員会が交通手段を確保するなど、何らかの形で通学保障を継続することとしております。

以上で、学校・地域間の距離に関する説明を終わります。

委員長

はい、ありがとうございます。それでは、以上の説明、(1)、(2)をいただきましたが、皆様方の方からご意見、ご質問等ございますでしょうか。

委員

1つちょっと質問があるんですけども、5番の下の方の愛南町における課題というところで、教頭が配置できない、養護教諭が配置できない、3学級以上というご説明があったかと思うんですが、これは町でなんとかできる課題なのかなと思うんですけど、何か規程があって多分行ってると思うんですけども、これ、未来の学校っていう所に行くまでの間に、子どもたちに不都合がないように、こちらの規程とかを例えば変えて教員を配置するとか、そういうことを考えることはできないんですか。

教育長

はい、説明いたします。これは、教職員定数という国の基本の法律に基づいてそうなっていますが、町の、あるいはそれぞれの自治体の工夫によってできる、克服できるものではないんですけれども、こちらから、県の教育委員会へ具申して、いわゆる激変加配、つまり、急に小さくなった学校で、加配枠とか、規程であれば教頭もあるいは養護教諭も配置できないんですけども、病院からの距離があまりに遠いからっていうことで、養護教諭をぜひという風な要望をして、実際、それを県の教育委員会の方に認めていただいて、本来であればいいんですけども配置するっていうようなことは何度もこれまでもありましたし、今年もそれに努力をしたところですよ。

委員

通学時間の関係なんですけど、ここに示されとる通学時間っていうのは、一定の距離数を掛けているんですかね。

事務局

基本的にその地域の中心から計測しておりますので、若干の前後っていうのはやはりあると思います。

委員

スクールバスだったら、止まって降ろして止まって降ろしてとか何回か繰り返すんで、もうちょっと時間がかかるかなと思うんですけど、その辺はつかんではない。

事務局

実際の時間というのはこちらでも把握はしておりますて、確かに、例えば西海の中泊からですと船越に停まって御荘中学校に行くことになりますので、やっぱり停車する分時間は伸びるようになっておりますが、遠距離になるところについて愛南町の方でも少しでも配慮をということで考えておりまして、例えば、由良半島の先の魚神山から通う子がいるんですけども、魚神山からについては、魚神山から直行で御荘中学校まで行く便と、また、油袋が発で家串、平落、須ノ川、柏と停まって御荘中学校へ行く便との2便を出して、なるべく通学の負担にならないようなというところで、できるところについては配慮しているところです。

委員

もうちょっとですね、ルートのなものも考えて、特に小学校の場合になると思うんですけど、ここ経由でこう回って、こう行くと何分ぐらいになるなっていうような、ちょっと資料も欲しいなっていうような感じはします。

事務局

わかりました。それでは次回、実際のスクールバスの経路と所要時間の分かる資料というのをまた皆さんの方に提示したいと思います。

委員

学校・地域間の距離で、中学校なんですけど、御荘と城辺から一本松へというのは、やはり想定見ただけで、網代からだったら1時間以上かかるんですけど、一応想定をしていただいて、判断の材料としてデータを挙げていただいた方がいいのかなと思いましたので、検討お願いします。

事務局

わかりました。次回、一本松までの距離を入れたものも提示したいと思います。

委員

すいません、ここの、学校・地域間の距離のこのバスというのはスクールバスのことですかね。

事務局

スクールバスと、一部、路線バスを使っている所もあります。

委員

そうですね。朝、時々国道通りよったら、平山の停留所から何十人かの子どもが乗って平城小学校に行つとるでしょう。そんなのとどんなに経費的には違うのか。それで宇和島自動車は喜んでるのか。そこらへんあたり、スクールバスより安いのかどうなのか。バスの活性化にはなるとは思います、他のところはそれは使っていないのか。どうなつとるか、ちょっとお聞きしたいと思うんです。

事務局

はい。スクールバスは、基本的に学校が無くなって再編された地域の児童生徒の通学保障ということで運行しておりますので、例えば菊川から平城小学校までですとか、魚神山から家串小学校までとかということで運行しております、今 16 路線あるんですが、基本的には学校が無くなった地域からの通学保障ということで運行しております。

先ほど言われました平山から平城小学校まで路線バスで通うというのは、通学が遠距離になる子についての保障ということで、かつては平山から平城小学校まで徒歩で通学していたようですが、今は、距離が 3 キロ以上ある児童生徒については、町の方で路線バスの定期券購入費を補助しております。

現在路線バスを使っているのは、平山から平城小学校まで通う児童と、須ノ川から柏小学校に通う児童です。それから、御荘中学校にも一部、距離の遠い子で路線バスを使っている生徒がおります。

経費的な面ですが、路線バスの場合は定期代で済みますので、スクールバスよりも大幅に経費は下がります。ただスクールバスについては、学校統廃合による通学保障の条件ということで運行をしております。

委員

わかりました。町営スクールバスっていうのは運転手さんのいろんな経費があるので、そしたら路線バスの定期券で通う方がかなり安いということですよ。

事務局

はい、その通りです。スクールバスになると、どうしても車両の維持費ですとか運転手の経費もかかりますので、その分やっぱり高くなるということになります。

委員

分かりました。路線バスはなかなか使えないということですよ。

事務局

そうですね。宇和島自動車も今、国道を走る便だけになったと思うんですが、あんなバスの方はちょっと本数が少なくて時間がなかなか合わないというケースが多いかと思います。

委員長

それではここからグループ協議に移ります。協議の説明を副委員長さんからお願いします。

副委員長

はい、失礼します。

では、グループ協議の流れを説明します。最初に、先ほどの事務局からの説明や委員の皆様個人の思いをもとに、愛南町の学校規模や適正配置における課題について、委員の皆様それぞれのご意見や考えを各テーブルに置いてある付箋に書いてください。この作業は5分程度でお願いいたします。次に、付箋に書いていただいた意見をグループの中でそれぞれ発表していただき、愛南町における適正な学校規模や適正配置に向けての意見交換を10分程度で行ってください。そこで模造紙に付箋を貼り、同じような意見ごとにまとめて分類します。そのあと、進行役が中心になってグループで話し合ったことを5分程度でまとめてください。最後に、グループごとに話し合った結果を発表していただきます。

経過時間は私からお知らせいたします。何かご質問ありませんか。

では協議を始めます。まず、愛南町の学校規模や適正配置における課題について、委員の皆様それぞれのご意見や考えを各テーブルにある付箋に書いてください。

(グループ協議終了後)

副委員長

時間になりましたので、それぞれの班から発表をお願いしたいのですが、1班さんからお願いしてよろしいでしょうか。

ファシリテーター

適正規模とか時間、距離も合わせてなんですが、距離的なもの、時間的なものとか、学校が何校というか、まずは目的を持って子どもたちが通える学校になってほしいと。特に部活動であるとかそういう風な、何かこう「やりたい」ということを重視できるような環境にできるといいなと。そういう環境でいくと、やっぱり中学校1校とか小学校1校とかっていう風に、さっきの適正の資料からいくといくんだ

ろうけど、その人数の問題ではなくて、やっぱり目的を達成できるという風なことが大事なんではないかなと。そういう意見が出ていました。

そういう中で、地震や津波対策とかも配慮された学校、そういう風なことが、やっぱり避難できるからということではなくて、やっぱり安全なところにそういう学校があるべきではないかなという意見もあります。

それから、時間的、距離的なもので言うと、そうですね、時間的に許すなら、朝ゆっくりスタートできるとか昼過ぎに終わるとか、ある程度のそういうゆとりがあるような通学が可能であればいいんじゃないかなと。で、どうしてもそれが難しいなら、下宿とかっていう風な、遠いところは下宿とかいう風な案も取り入れてやればいいんじゃないかなという意見も出ていました。

副委員長

はい、ありがとうございます。では、2班さん、お願いいたします。

ファシリテーター

失礼します。2班の方は、やっぱり旧町村に1つというか、小規模校も残しつつ、小規模校じゃないですね、極小規模校も残しつつ小規模校に通えるという、やっぱり保護者、子どもの選択肢が残るような形で配置ができたらいいのではないかなというような話になりました。

小さい学校の規模がいい人は小さい学校を選ぶで、よりもうちょっと大きい学校で学びたいっていう保護者や子どもがいれば、そっちにも通えるっていう選択肢が広がるのはいいんじゃないかなという話になりました。

で、学校そのものの内容としては、やっぱりそれぞれの学校ごとに、やっぱり魅力化とかと特徴っていうのをやっぱり色濃く出して行って、ここにいたらこんなことができるとか、こういう風にできるみたいな、やっぱり魅力をなんか前面に出せるような形にできないかっていうこと。

それから、地域と関わる活動っていうのがやっぱ増えてますけれども、やっぱり地域を巻き込んだ学校っていうのが、やっぱり未来に向かっての学校じゃないかなっていうような話し合いになりました。

スクールバスについては、閉校した学校から次の学校に移るためについていう視点で最初はしたかもしれないんですけど、公共機関であいなんバスとか、それから宇和島バスが使える距離にある子どもたちについては、やっぱりスクールバスから切り替えるっていうことも選択肢としてはあるのではないかなという話になりました。

副委員長

はい、ありがとうございます。はい。では、3班さん、お願いします。

ファシリテーター

たくさんの意見を出していただきました。簡単にまとめたいと思います。

まず、適正配置の説明があったので、のちのちやっぱり1校もしくは2校がやむを得ないんだろうなと。ただ、その中でもやっぱり選択肢を増やす意味っていうのが大きいのと、ただ、2校であれば競い合いができると。今なかなか競い合うこと自体が難しくなっている。ですから、そういった面でも最終的には1校、2校で考えないといけないかなと。

ただ、1つの考えとして、低学年は分校で、やっぱり高学年になったら本校に行く。

やっぱり小さいうちは手厚く。で、あとはまた集団生活という形に持っていくのも1つの方法ではないかっていう意見が出ています。

で、やっぱり課題としては、地域の交流をもっと増やさなければならない、部活面で言うと、今ほとんどが団体がもう組めないような環境になっているので、やっぱり最低限度その確保をする必要がある。そういったのが今の課題です。あと、近い学年での活動ができない学校が非常に多い。同学年での活動ができないっていうのが大きな課題となっているので、ここも先ほど言いました交流とかできれば1つの課題解決にはなるかもしれませんが、いつもっていうわけにもいかないんで、そういった面も今後考えていく必要がある。そういった意味での、もしくは1校や2校、これ小学校も中学校もなんですが、そういった考えが出ています。

あと、魅力ある学校としては、また地域にはないもの、例えば親子イベント的なものを学校でというか町全体で企画して、月に1回なりでもいいですけど、そういったもので交流の場を増やしていったりとか、いろんな活動をするにしても、フォローがいるというか、フォローしていただく方がいるので、そういったことを率先してというか、そういうのを募集するとか、そういう学校であったりとか。土日も学童があったらいいなと。やっぱり親も月から金だけ働いてるんじゃないので、土日働いてる人ももちろんいると思いますから、そういった意味でも、そういうのもあったり、昼食もあったり、学校給食ではないですが、そういうのが出たりとか、そういうことができるということ。

あと、今現状で考えたら、他校との交流っていうのは現在してはいるんですけど、もっと増やしていけるような魅力ある学校にできる。

養護教諭が配置できないとかいう問題に対しては、やはり看護師さんが地域にはいるので、そういう派遣とか、そういうものができないかな、イベント事だけにはなるかもしれませんが、そういったものも考えることはできないかというような意見があって、そうすれば、子どもたちが安心、安全で過ごせるような環境に少しでも近づくんじゃないかなということでした。

副委員長

皆さん、ありがとうございました。それぞれ各テーブル、本当に子どもたちのことや今の現状についてのご意見をいただけたと思います。

今、皆さんのご意見を聞いていて思ったのが、その子どもたちファーストという

か、そういう目線で皆さんが今立っていただいているっていうこと自体が、すごく嬉しいです。

で、今あったご意見の中に、目的を持って通える学校環境がいいっていうことであったりとか、その中に、学校の魅力化や地域を巻き込んだ学校にしていこうっていう、そういうことがイメージ化できるような具体的な案が今日出たことが、とても嬉しいです。

そして、皆さんの中から出た選択肢をもうちょっと増やしてあげてほしいっていうところも、ちょっと子どもたちにとってすごくいいんじゃないかなと思うんです。

皆さんの各テーブルを回っていて思ったのが、中学校に上がって人間関係を形成するっていう課題があるんですっておっしゃってた方がいらっしゃるんですけど、これって、小学校と中学校別々で考えることなのかなと思いきや、実は、小学校から、これって適正な配置をすれば、もしかしたら、人間関係の多様性を学べる、すごくいい環境づくりになるんじゃないかなっていうのを思ったので、大人数でいるっていうことがいいっていう場合と、1つご意見あったように、少人数でも、本当に極小規模校でも学べるっていう、そっちがいいよって選べるっていう、その選択肢をやっぱり今回作ってあげられたらいいなっていうふうに私は思いました。

ちょっとまとめ難しいんですけど、すごく皆さんの学校や子どもたちに対しての熱い思いが聞けてよかったなと思います。ありがとうございました。

委員長

はい、ありがとうございました。では、続きまして、アンケート調査につきまして事務局の方からお願いいたします。

事務局

はい。アンケート調査についてですが、皆さんの方には、前回、令和3年の検討委員会の際に実施したアンケート調査の項目と結果の方をお配りしております。項目としては、Q1で、現在お子さんが通っている学校規模での教育についてどう思うか、またQ2で、学校の統合についてどう考えるか、また、Q3とQ4ではその理由についても尋ねています。

もう1枚は、その調査結果です。今回、この学校の未来検討委員会でも保護者や教員の皆さんなどへアンケート調査をする予定としておりますが、その内容については次回以降また皆さんと協議していきたいと考えておりますので、この質問項目と結果については、委員の皆様も参考までにお目通しいただいた上で、次回の学校の未来検討委員会の際にまたご意見等出していただいたらと思っております。

簡単ですが、アンケート調査については今回は以上です。

委員長

はい、ありがとうございました。アンケート調査につきまして、何か皆様方、ご

質問等ございますでしょうか。具体はこれからだとは思いますが、よろしいですか。

はい。それでは、その他になりますが、次第4でございます。

本日の会議のこと、あるいはこの会に関することで何かご意見等ございましたらお願いいたします。

委員

さっき発表の中にあった下宿、寮っていうのは、私、中学校の時寮だったんですけど、〇〇中学校だったんです。今はないんですけど、そういうのって愛南町では考えることはできるんでしょうか。

教育長

「はい」とはここでは言えないかもしれませんが、実は南宇和高校の学生寮、我々も今検討しているところです。で、今、さっきのような、いわゆる小・中学、中学校になろうかと思いますが、義務教育の子どもたちが寮にという風なこと、検討してもいいんじゃないかなと。私、すごい私的な感じですけど、検討してもいいんじゃないかなという風にはお話を聞いてて思いました。ただ、それが議会でOKとか、そういうわけではないんですけども。でも、土俵に上げる価値はあるっていう風に思いました。ありがとうございました。

委員長

はい。その他、いかがですか。

委員

学校統合とはまたちょっと外れるかもしれないんですが、不登校でこう、なかなか学校に行けないお子さんたちのために、フリースクールっていうものも愛南町にはないので、そういったものもできて、でも、先ほどのお話で、小規模校と大規模校で2校にして、行きやすい方選ぶとかっていうお話も出てたので、そういったことで、行きやすい方選べて、愛南町の中の子どもさんがもう本当にどこかしらに通えるっていうところができるといいなと思うんですが。なので、ちょっとフリースクールとかいうのも、できるといいかな…と。

教育長

現状といいますか、不登校の子どもたちのためにということで、サポートルームというのが各学校にできました。

で、今度また1つ増えて、そういうところで居場所がある子どもがちょっとずつ増えているのはいいことだと思いますし、旧満倉小学校に子ども支援センターがあり、で、今度は児童発達支援センターができますね。そういう福祉の領域からもそういう様々なサポートができたかなと思っているところです。

委員長

はい、よろしいですかね。その他、いかがでしょうか。

じゃあ、ちょっと最後に私の方からも。せっかく2時間もかけてやってきてますので、一言だけ。

皆様方のご意見を拝聴しておりまして、すごいこう、アイデア豊かと言いますか、参考になるところが非常に多かったです。

私もですね、寮はビビッと来ておりまして、やはりこのバス通学が遠い、行き1時間帰り1時間で2時間かけるんだったら、寮で集団生活をした方が、コスト的にもいいんじゃないのかなと思ったりとか、あと、できたら愛南町の外からも、この愛南町の学校には来てほしいなと、そういう心構えを示す意味でも、寮って是非前向きにいただけるといいのかな。なんかイギリスのパブリックスクールというかね、全寮制の、子どもたちが健やかに育ちそうなイメージもありますので、そのあたり、すごい強み作りになるかないうことと、あと、学年を、1から3、4から6、7から9っていう、この3段階で考えられてる方が結構多かったかなと思います。最近、1から3で、基礎学力ですよ、そこで、タブレットをガンガン使い回してではなくて、やはり、しっかりとした日本語を学び、日本の伝統文化も、心と体の基礎を作る、日本人の基礎をですね、そういうところを、ちょっとこう、思い直すっていう流れも出てきております。

で、ICTとか、4からで十分間に合うっていう。〇〇市あたりも、すでにタブレット、1年から3年は、おもちゃみたいな使ってますんで、4年生以上から本格的にいうことで、そういう1から3、4から6で切り分けながら、やはり愛着形成の時期と、自立に向かう時期と分けていくっていうのは大事な思います。

で、4から6でも、部活の予備軍みたいな感じでね、入れてもいいかもわからんですね。

そして、中学校で、皆様方、放課後の子どもたちの暮らしぶりっていうのは結構、着目をされてるみたいでございまして、部活の話はもういろんなところから出てきました。やはり勝てる部活って私も大事やと思うんです。勝つことが最大のモチベーションの向上になると思います。いつも出ては負け、出ては負けてはやっぱ伸びないし、モチベーションも下がるわけですよ。やはり勝てる部活、子どもたちに勝つことの喜びをっていうのも1つ大きなポイントやと思います。

あと学童であったりとか、あと放課後ですね、習い事であったり、地域の行事であったり、こういったものに子どもたちが出ることを、やはりこう町をあげてですね、優先順位を上げていきたいと思います。お家でいるんじゃなくて、やっぱりそういう行事ごとにはどんどん出ていこうという、こんな気運も作っていけたらなと。テーマは学校づくりではあるんですが、学校を核にした地域の教育システムづくりっていう、そういう文脈でこの会を捉えていくっていうのも、1つ大きな視点かなと思いました。

あと、最後でございしますが、やはり義務教育でございします。やはりこう、好きな

ことを探してやるっていうのも大事なんですけど、義務教育の時代っていうのは、できることをどれだけ増やすかっていう時期でもあります。できることがいっぱい増えたら、その先がやはりこう豊かになります。やはり小中学校の時代で絞りすぎると、絞りすぎてうまくいった方もいるんですが、あくまでレアケースで、多くの子どもたちにとったらいろんなことができる、その中から相対的に自分はこれをもっと伸ばしたい、ここに力入れたらいいっていうですね、そういうところを目指していけたらなと。つまり、やはりいろんな経験とか体験とかですね、活動っていうのを学校教育の中で、地域の中でできるような、その全国的なモデルがですね、こう愛南町であればいいなっていうですね、思いを皆様方のお話を聞きながら感じた次第でございます。

すいません、ちょっと長くなりましたが、以上でございます。

それでは、最後、事務局の方にお返しいたします。

事務局

はい。露口委員長、〇〇副委員長、どうもありがとうございました。

では、閉会挨拶を中尾教育長の方から申し上げます。

教育長

はい。長時間にわたってどうもありがとうございました。

皆さん、本当に素晴らしいご意見、アイデア、それから、露口委員長、副委員長さんから様々な示唆をいただきました。ありがとうございました。

全く同じことを、同じことというか同じような内容の質問を毎月教育長室に来る高校生たちの授業の中で言って試してみました。高校生たちはたくさん意見が出たんですが、2つだけ紹介します。

小学校、幼稚園も入るでしょうね。幼小中高大学生が一緒に学んでいる学校って面白いんじゃないですかって言いました。

それから、火曜日は学校の先生が授業をしない日にしましょう。必ず地域に出て行って様々なことを学ぶ、あるいは地域の方が学校に来ていただいてゲストティーチャーで学ぶ1日っていう風なことも高校生が考えて素晴らしいなと思いました。

ですが、冒頭で申しました通り、この未来の学校は今、大人たち、私たち大人たちの選択によって形づくられます。ぜひそれをですね、ワクワクして、創造的なお気持ちで、この20人が力を合わせて作っていただけたら大変ありがたいです。

これからもまだまだ続きます。どうかよろしくお願いします。

事務局

では、これをもちまして第2回愛南町学校の未来検討委員会を閉会いたします。お疲れ様でした。